

「書けた奴から前持ってこーい」

担任の先生の声が教室に響く。

俺は机の上に広げられた進路調査票に書かれている『就職』と『進学』の文字をじつと見つめていた。

進路調査票にはそれぞれ第一希望から第三希望までの項目があり、埋められている項目は進学の第一希望のみ。しかし、大学名は空欄。

これで本当にいいのだろうか、と月野秋樹^{つきのあき}は思案していた。

中学の時は特に何も考えずに安易に進学と書いたが、高校二年生の今となつてはそうもいかないのだろう。というか高校に進学しなかった奴なんて一人もいなかったけど。

やりたい事が思いつかなければ大学に行つて、そこでまた考えればいいよと大抵の人は言う。しかし、そのやりたい事が生活のための金を生んでくれるとは限らない。世間ではどうも「やりたい事」将来したい仕事」と一緒くたにして話が展開されているような気がしてならな

い。もしかしたらそういう意味も含めて「やりたい事」と言っているのかもしれないが、そんな都合よく自分のやりたい事が二、三年で見つかるとは、俺には到底思えない。納得いかん。周りの生徒よりもたっぷり悩んだ結果、やっぱり進学でいいかと思ひ提出のために席を立った時、まだ進路調査票が真っ白な状態の生徒が一人見えてしまった。

朝倉夏菜^{あさくらかな}。細くて整った鼻。艶やかな黒髪。凛とした端正な顔立ちをしているが柔和な雰囲気を持ち、近寄りがたさはあまり感じさせない。器量がよくクラスでも男女双方から人気のある女性だ。

しかし、今日の彼女は伏し目がちにして所在無げに進路調査票を見つめていた。普段は活発に友達と話しているのが印象深い彼女だけに妙にその姿が目には焼き付いてしまった。進路の事で悩んでいるのだろうか。

進路調査票を提出し終え、席に戻った俺はぼんやりと窓の外を眺めていた。

「書けなかった奴は、×切明日までだからなー」

先生の呼びかけに反応して教室を見回してみる。書けていなさそうなのは、朝倉さんを含めて三人ほどだった。

ま、三者面談の事とか考えたら適当な回答はできないからな……悩むのもしようがないだろうと思った。

身の入らない授業が終わり、ようやく放課後が訪れる。進路の事なんか考えていたせいか気分が若干重い。席を立とうとした時、クラスメイトの徹平が鞆を引っ掴んでこちらにやってきた。

「秋樹、帰ろうぜ」

「おう……あれ？徹平って今日部活……野球部なかったっけ」

「今日は家の手伝いするから休む」

徹平の家は自営業らしいので、こうして時々部活を休んで家の手伝いをしている。卒業後は就職の道を選んでそのまま家業を継ぐのだとか。悩みが無くて羨ましい限りだ。

「そっか、じゃあ帰るか」

俺も鞆を肩に引っ掛けて徹平と共に教室を後にする。昇降口で靴を履き替え外に出る。十月半ばになり日の入りが早くなってきた。夕焼けが雲一つ無い空を鮮やかな茜色に染めていた。野球部の練習が既に始まっているようで、カキーンという小気味いい音が耳に残る。校門を出た辺りで徹平に声をかけた。

「徹平って卒業したら就職だっけ」

わかりきってはいたが、俺はなんとなく確認のために尋ねる。

「自営業だしな。それしか選択肢ないけど、別に不満もないしなあ。秋樹は？」

「俺は……とりあえず進学かな」

とりあえず、と言ったのは自信の無さの表れだろうか。と言った後に気づいた。

「とりあえずねえ、って事はまだあんまり将来像見えてない感じか」

ずばりと言われてしまった。全く持ってそのとおりなので何も言い返せない。

「でも、考えるの後回しにしてると辛くなるんじゃないかね。俺が言っても説得力ないけどさ」
確かに、徹平には俺の悩みはわからんだろう。それでも俺の事を考えてこう言ってくれてい
るといふのは伝わる。大学でやりたい事みつければいいじゃん、なんて安易な事を口走らない
だけありがたい。

「ま、この件は俺からアドバイスできる事はあんまりないかな」

「十分だよ」

それっきり二人の間に会話はなくなってしまった。

翌日の放課後。帰りに本屋でも寄って行くじゃと思いつながら軽く伸びをした矢先に、徹平が
ちよつと慌てた様子でこちらに向かってくる。

「わりい、秋樹！ 掃除当番変わってくれ！ 野球部の先輩から練習試合の準備しとけって言わ

れてるんだ！」

「えっ！今言うの」

「ホントスマン！すっかり忘れててさ！」

徹平はスリスリと手を合わせながらこちらを拝み倒してくる。運動系の部活の上下関係が、校内でも一段と厳しいのは最早伝統と言うべきか様式美と言うべきか。

「仕方ねえなあ、俺の掃除当番の時ちゃんとな変われよ」

「サンキュ！頼んだ！」

徹平はそれだけ言うと、危なっかしげにダッシュで教室を後にした。

俺もいつかは厳しい上下関係を味わうんだろうか。バイトをした事がないので、こういうのは全く想像がつかない。上下関係って面倒そうだなあ……。とりあえず頼まれたからにはさっさと終わらせるか。

くそっ、焼却炉へゴミ箱を持っていく途中に、ゴミをぶちまけてしまったせいですっかり遅くなっちゃった……。もう廊下や教室には生徒の姿がほとんどない。あとは部活に行った生徒ばかりだろう。窓から射してくる光は、ほんの少しだけ赤みがかかっていた。

鞆を取りに戻るために、俺は教室へと歩を進めた。もう誰もいないよなあ……。と思いながら

覗いた教室に机にうつぶせになっている生徒を一人発見した。誰だろうと思つて近寄つてみると、朝倉さんだった。女子のうつぶせなんてかなりレアな光景だ。こつそり写メを取つて左上にSレアという文字を付けたいまでである。

もちろんそんな事はせずに一人だけとは珍しいなと思いつつ、俺は鞆を取るためにガラツと扉を開けて教室に入った。

「ん？」

朝倉さんが顔上げた。寝ていたわけではなさそうだ。

彼女は俺を視界に捉え、澄んだ瞳をこちらに向けてくる。

「あはは、変なところ見られちゃったね」

彼女は恥ずかしそうに頭をカリカリと搔いた。ふと机の上を見ると進路調査票が広げられている。

「あれ、進路調査票の提出つて今日までじゃなかったっけ」

「あー、うん」

「まだ書いてなかったんだ」

「ちよつと、迷つててね。月野君まだ帰つてなかったんだ」

昨日の彼女の様子から、まだ進路が決まっていなかったかと思つていたがやはりそうだった。

たようだ。今しがた迷っているというワードを凶らずも引き出したので、ちよつと相談にのつてみようと思った。……せつかく朝倉さんと話せる機会だし。

「なんか悩んでる事あるんだったら、話してみない？」

「え、いやいや悪いよ。こんな話ししても多分つままないし」

「いや！ つまなくなんてないよ！ 絶対！」

重い雰囲気を出したくなかったので、できるだけ軽い感じで喋りつつ彼女の前の席に腰掛け
た。

「うーん……」

朝倉さんは俺とは目を合わせずに、右手に握られたシャーペンをくるくると回している。

やがて大きなため息を一つ吐いた後、訥々と話し始めた。

「月野君ってさ、行きたい大学とか、大学に行ってやりたい事とかある？」

「俺？ そうだなあ、今のところは特に……」

「私、小さい頃に絵を描いて親に褒められた事があって。ほら、よく幼稚園の時って親の似顔
絵とか描かされたりしなかった？ 父さんと母さんがそれ見てすっごく喜んでくれて、それが
いまだに忘れられなくてさ。で、中学生の時に漫画に出てくるキャラとかノートに書き写すの
にちよつとハマってた時期があつて」

朝倉さんはまるで俺が目の前にいないかのように喋り始めた。いや、さっきの質問に対して俺の答えがスルーされた事を揶揄してるわけじゃないよ？

「その頃から、絵を描く事ってこんな楽しいんだって思い始めてさ。もっともっと他の人の描いた絵とか見たり触れたり、自分でも描けたらいいなって。そういう事が勉強できる大学に行きたいなって」

始めは恥ずかしそうに話していた朝倉さんだが、やがて喋り方にも熱が入ってきて実に楽しそうに自分の体験談を語っている。ああ、朝倉さんってこういう感じで笑うんだ。しかし、これほど楽しそうな顔している朝倉さんは一体何に悩んでいるというのか。

そう思った矢先、朝倉さんの表情に暗い影が差した。

「でも……大学にはちよつと行けなさそうなんだ」

「……どうして？」

「大学に行くための学費が……ね。私、中学二年の弟がいるんだ。来年受験生で、さすがに高校は卒業させてあげたいし」

朝倉さんには弟がいるのか……。

「でも、大学って確か奨学金があるよね？ それでなんとかならないかな？」

「……うん、かもしれない」

なんとなく要領を得ない。まだ何か不安要素があるのだろうか……？

「母さんがずっと入院してて動けない状態でね」

「……え？」

「階段から脚滑らせて、足腰やっちゃったんだ。もしかしたら後遺症残るかもって医者に言われちゃって。んで、家事出来る人が母さん以外いなかったから、今は私が全部一人でやってるんだよね。あ、あと母さんの見舞いももちろんしないとだし」

声に張りはないが努めて平静を保とうとするように、朝倉さんは澁みなく会話を続ける。

「最近、大学の事とか考えてる暇がほとんど無くて、もうこのまま働いた方がいいのかなーって思い始めて……月野君？」

俺は席を立って、朝倉さんを正面に見据えた。

「ゴメン！」

朝倉さん以外に人のいない教室に、俺の声が響き渡る。朝倉さんはポカーンとした表情で俺を見ていたが、やがて両手をばつと前に出して慌てた様子でぶんぶんと振り始めた。

「ちよ、ちよつとそんなに大きい声出さなくても」

「違うんだ」

「……違うって？」

「俺、頭の中ではそういう人も世の中にはいるだろうなって理解してた。いや、理解してる気になってたんだ。けど実際にそういう人が目の前にいるってことがわかった時に無性に怖くなつて、軽い気持ちで相談にのつた事が申し訳なくて、俺自身の進路の事も真剣に悩んでなかったんだなって思ったら情けなくなつてきて……ああ、何言ってるかわかんないよね。とにかくゴメン！」

深々と頭を下げた後、反応が返つてこないなと思いつつ、朝倉さんの様子をチラリと窺つた。
「……ぷっ」

「……は？」

「あっははははははは！」

盛大に笑われてしまった……。

「ごめんごめんっ……はあ、いや月野君の反応が思つてたのと全然違つたから思わず笑つちやつて。もっと重い感じの反応がくるかなーって思つてたんだよね」

「うーん……俺は割りと重い感じで受け取つて応えたつもりだったんだけど」

「でも、月野君が真剣に受け取つてくれたんだなつてのは伝わったよ。だって女の子に対して怖くなつたなんて言える人ってなかなかいないと思うよ？」

「そう……かな？」

俺がさつき言った事は偽りのない事実だ。人にはそれぞれ歩んできた人生がある。自分以外のものは決して経験する事はできない。しかし、経験することはできなくても感じ取る事ができた。確かにそこに存在しているのだと。違う世界が確かにそこにあつたのだという事を。

朝倉さんは憑き物が落ちたように、普段見せるような笑顔で席を立った。

「私、帰って父さんと進路について話し合ってくる。月野君、ありがとう」

「何もアドバイスできてないと思うんだけど……」

「そんな事ないよ、じゃまた明日ね！」

そう言いつつ朝倉さんは教室を出て行った。進路調査票は持ち帰ったようだ。べ切は今日までだったが先生も一日くらいなら許容してくれるだろう。あくまで調査なんだし。

窓の外を見る。校庭ではユニホームを来た野球部員達が、斜陽を背に受けつつ練習に勤しんでいる。

俺はゆっくりと席を立った。さて、やる事ができたなと思いつつ、大学の資料を調べるため図書室へと足を向けた。